

第74回「三縁の会」創立8周年 特別記念企画

<2018年(平成30年)5月24日(木) ウィズユー・with you>

<講師>

佐賀 千恵美(さが・ちえみ)様 佐賀千恵美法律事務所 弁護士

1952年 熊本県熊本市 生まれ 東京大学法学部 卒業

吉見 弓子(よしみ・ゆみこ)様 京都商工会議所 会員部 次長

1961年 京都府福知山市 生まれ 同志社大学大学院社会学研究科産業関係学専攻 修了

外崎 佑実(とのさき・ゆみ)様 NPO法人グローバル人材開発センター コーディネーター

1986年 青森県弘前市 生まれ 京都大学大学院経営管理教育部経営管理専攻 修了

<司会>

仲田 匡志(なかだ・まさし) NPO法人グローバル人材開発センター 事務局長代理

1991年 沖縄県沖縄市 生まれ 京都産業大学法学部 卒業

<テーマ>

ポスト平成「女性活躍時代」はホンモノか

・活き活きと仕事をする 幸福感を求めて



佐賀 千恵美 様



吉見 弓子 様



外崎 佑実 様



仲田 匡志 様<司会>



木下 京介 様<記録>



各写真 左から 外崎佑実 様、佐賀千恵美 様、吉見弓子 様、仲田匡志 様



仲田：本日のテーマはポスト平成「女性活躍時代」はホンモノかということで、フロアのみなさまはこのタイトルに対し色々とお考えのところもあるかと思いますが、率直にパネラーの方々からぶっちゃけた話（笑）をしていただき、そこにあるホンネから女性が活躍できるヒントやお知恵をいただければと思います。

今回、色々なデータや文献を記載した資料を配付しています。こちらを参考にしながら進めてまいりたいと思います。<同ページの「【参考資料】三縁の会8周年記念企画」をクリック>
それでは、まずはじめに、パネラーの皆さまから自己紹介をいただきましょう。

佐賀：私は、1年間だけ東京地検で検事をし、その後6年間、専業主婦として子ども二人を育てました。子育てが一段落した後、今の仕事である弁護士としての活動を京都で始めたのです。弁護士としては、主に民事事件を担当しています。

仲田：ありがとうございます。佐賀先生からは先生がお勤めになられた当時から今日に至る、女性の職場環境の変化や活躍の場について、色々とお聞きできればと思います。
それではお隣にまいいまして、吉見さんお願いします。

吉見：京都商工会議所に入所し今年で5年目となります。職業人としては38年前にスタートしました。はじめは京都府庁に高校を卒業後に入庁し、色々な部署でお仕事をしてきました。主には、内部管理のお仕事でしたが、ジェネラリストとして様々な仕事を経験させていただきました。
25年間京都府に勤め退職した後、3年間フリーランスで活動し、その間にインテリアコーディネーターやカラーコーディネーターなどの資格を取りました。
女性専用のアロマセラピーの仕事もしていたのですが、そのとき、女性の働く悩みを聞き、キャリアアカウンセラーの勉強をしたことと、元々「働く」ということや「個人と組織の在り方」について興味があったことが相まって、雇用に関する今の仕事につながっていますね。
フリーの後、ご縁があり厚生労働省の関係団体や専門学校での仕事を経験したことも含めて自分の中では、一本筋が通っていると思っているのですが、普通の方と少し異なるキャリアを歩んでおります。

仲田：なるほど。カラフルなキャリアを重ねられていますが、全てがつながっているような印象を受けました。吉見さんには、色々な視点から見た女性の活躍についてお聞きできればと思います。
ではワカモノ代表の外崎さんよろしくお願ひいたします。

外崎：青森県弘前市の出身で、大学受験の浪人時代から、京都に来ました。
今のお仕事はグローバルセンターで、個というローカルを磨き世界で活躍する若者をオール京都で育てていこうと、産業界や行政、大学、市民の方と一体になって学生と社会人の「出会いの場」つくることをしています。
私はその中でも大学関連携の支援や京丹後市のまちづくり事業も担当しています。
これまでのキャリアのお話をする、グローバルセンターに入るまでに紆余曲折ありまして。アルバイトやフリーター、非正規雇用としても働いてたこともあり、雇用の形でも色々な経験をしてきたんです。
その中でも自分にとっての「やり甲斐」が1つキーワードになっていたかなと思っています。そのことも含めてみなさまにお話しができればと思います。

仲田：ありがとうございます。外崎さんには若い世代の代表として、イマドキ女子の働くについて色々とお話しをお伺ひしたいものです。

早速本題に入りますが、「生き活きと仕事をする 幸福感を求めて」というサブテーマからスタートしましょう。

はじめに佐賀先生、過去、現在という時代で見たときに、女性が生き活きと仕事ができる環境の変

化についてお聞かせください。

佐賀：1960年代の当時、女性は低い地位だという意識があり、父の友人が父に、私のことを「女が勉強してたら嫁に行けんようになる」と言ったこともありました。そんな中、私の父は、熊本から私を東京の学校に行かせて弁護士になるために勉強をさせてくれました。父の友人の「嫁に行けんようになる」という考え方の通りに生きていたら、私の人生はずいぶん違ったものになっていたかと思いますよ（笑）。

それから、弁護士のための勉強をしていた1970年頃ですが、新聞にある司法研修所教官士の発言が掲載されました。「男が命を懸ける法曹界に、女は来るな」というような内容で、新聞に掲載されるほどですから、当然批判的に取り上げられたんですが、当時はまだそのような雰囲気もありました。

また、私が検事になりたてのころ、検事の世界は男社会で、ある先輩が「自分の娘には検事はさせない」なんてことをこれからその仕事をする私の前で話されることがあって（笑）。大先輩なんて黙っていましたが、そうした空気感はありましたね。上司の中にはわいせつ事案を女性検事に担当させると処分が厳しいなどと言う人もいたのですが、私の直属の上司はそうしたことなく、いろんな仕事を私に担当させてくださったんです。

そうすると当然ですけど、私も任せていただいている分頑張ろうと思いますし、こういう風に私も部下を信頼して育てる上司になりたいなと思いましたねえ。これは昔の話です。

仲田：昔は女性が働きにくいイメージがあったのですが、やはりそうだったのかなと思うお話しですね。資料を見ていただいても、日本が女性差別撤廃条約に署名したのが1980年。たった38年前なんですね。（参考資料②）

佐賀先生のお話しと重ねると、ごく最近まで、女性に対する考え方の変化がゆっくりであったのかとびっくりしている次第です。

先生に質問を重ねたいのですが、昔から今まで、上司と部下の関係や職場環境の変化はどのように変わられたと思いますか。

佐賀：もちろん変わってはきたと思いますが、十分ではないと思います。しかも、世界的にみると残念ながら（日本は）まだまだだなというところはありますね。

仲田：なるほどありがとうございます。

次は吉見さんにご質問なのですが、ストレートにお聞きすると、生き活きとお仕事をされるには、何が秘訣だったかということをお聞かせください。

吉見：難しい質問ですねえ。そもそも私はやり甲斐というよりも、ホンネとしては経済的自立を目的として仕事を始めました。経済的自立が基本となって個人の自立があるんだろうと生意気にも高校生のときに考えていました。後で知ったのですが、当時は女性の大学進学率は15%程度で短大への進学が多く、それを含めても約40%の進学率でした。その頃は、高卒での就職も多く、今の若い

方々のようにやり甲斐で就職することはありませんでしたね（笑）。

仲田：今いただいたように、就職の目的の変化はキーになりそうですね。
つまり経済的自立という目的から、やり甲斐に変わってきているということです。
吉見さんの中で、仕事の目的が変わってきたのはいつ頃からでしょう。

吉見：私は働きはじめて10年くらい経ってから、仕事が楽しいと思うようになりました。職場の人間関係に悩んだ時期がありましたが、様々な仕事の経験を積み重ね、スキルが身についてきてから、前向きに、自分自身がお仕事を面白くしていくことが大切だと切り替えました。
望んでもすぐに周りの環境は変わらないのであれば、自分と一緒に仕事をしたいと思ってもらえる人になろうと思ったことがきっかけですね。

仲田：お仕事が慣れてきて、周りが見えるようになった時期に変わるきっかけがあったと。

吉見：もしかしらですが、今の若い方々はそんな時期に仕事を辞めてしまうということがあるではないかと思います。それは残念なことですね。

仲田：生き活きという意味では、佐賀さんや吉見さんに共通して、周りの環境が与える影響が大きかったのではないかと思います。
どのように考え方のスイッチを切り替えるかがポイントといえますね。
では、続いて外崎さんにお聞きしたいのですが、やり甲斐から就職を考える世代かと思うのですが、実際はどうだったのでしょうか

外崎：私は1年で入社した会社を辞めてしまい、フリーターなどを経て今に至るのですが、辞めてしまった会社は挑戦できる環境があり、やり甲斐はありました。
特にその会社で初の女性営業社員ということもあって、はりきっていたこともあるのですが、男社会に揉まれ、中々上手く進めない自分にへこたれてしまい、隣の部署のマーケティング部に異動させてもらいました。元々専攻がその分野だったので、ありがたい異動だったんですが、その会社で働き続けることがいいのかと悩み、退社することにしました。
辞めたときはいっぱいいっぱいだったんですが、今振り返ると、やり甲斐だけで飛び込んでしまい何も見えていなかったのではないかと、お二人のお話しをお聞きしながら思っていました。
まわりの同世代も目を輝かせながら、やり甲斐を求めて入社したものの辞めてしまう人が多くいましたね。

仲田：そうだったんですね。こうしてお聞きしていると、お三方の世代ごとに仕事への価値観があるのかなと思いました。また、佐賀さんは九州、吉見さんは京都府内の福知山、外崎さんは青森と、その土地ごとの風土や仕事観の違いもあるのかなと見ておりました。
生き活きと仕事をするためには周りの環境も大切ですし、自分が変わるということも必要ですね。

世代ごとの仕事の価値観もあり、時代の流れとともに、少しずつではありますが、女性が働きやすくなってきたのですね。

続いては「仕事と家庭の両立 子育てはいかに」についてです。

仕事と家庭という切り口ですが、女性は男性と比べライフイベントの比重が多いので、そのような点が生き活きと仕事をするポイントになってくるのかなと思います。

佐賀先生の中で、「仕事と家庭」を定義するとどのようになりますか。

佐賀：仕事はやはり、自分の人格と成長を実現していくものというイメージですね。家庭は自分にとってかけがえのない存在です。

私は6年間育児をしていたのですが、せっかく法曹になったのに何をしているんだという意見を聞くこともありました。私自身は、法曹だからこそ復帰もできると思っていたんですね。

いろんな価値観があるのでどれが正しいということはないのですが、そうした考え方の違いというはこのテーマでも大事なポイントだと思います。

自分の価値観で生き方を選ぶことが尊重されることが望ましいと思います。

仲田：吉見さんにも同じご質問をしたいのですが、仕事と家庭を定義するとどのようになりますか。

吉見：両立できていると胸を張って言えないのですが…。佐賀先生の場合は弁護士さんということで復帰のお話もありましたが、私は公務員でしたので辞めたら終わり。ということがありました。

なので、色々と制度を活用しました。妊娠が分かってすぐ、子どもが生まれる前から「保活」を行い、出産後2ヵ月後には職場復帰しました。

ちょうど2人目が生まれた年（昭和63年）から育児休業がはじまったのですが、もう保育所が決まっていたので、育児休業は利用せずに子育てと仕事を進めました。

私は、子どもは「社会」で育てるものであると思っています。家庭が最小の「社会」ですが、それだけではない様々な人に関わってもらう、触れてもらうことが成長につながるのではないかと思います。実際 二人の子どもを見ていると、早い時期から保育所を利用しましたが、その分たくさんの人々と出会い、触れ合ったことでたくましく育っていると感じます。

地域や家族といったたくさんの大人が子育てに関わるのが、今の社会ではなくなってきているため、子育てがしにくくなっているように思いますね。

私自身は「握力の強い女」を目指してましたので、家庭も仕事も手放さず生きてきました。（一同笑）

仲田：お二人とも、子育てや仕事に目標をお持ちだったと思うのですが、もう少しこうなったらよかったのということはありませんか。

佐賀：自分としては二人の子どもが3歳を超えるまでの6年間は仕事をしなかったもので、子どものために時間を費やしたと思っていたのですが、そんな幼いときのことは子どもは覚えてくれていない

んですね（笑）。また、弁護士の仕事を始めてからは、専業主婦の方と比べると、子ども視点では十分なことはできなかったのかなと思っています。お弁当をつくるひとつにしてもです。しかし、不十分ではあるが母親は一生懸命にはやっていたとみていてはほしいですが。

吉見：佐賀先生と同じ気持ちですね。私としては、学校行事は出来る限り努力してほとんど行ったつもりなのですが、子どもはたまたま私の来ていなかったことをしっかりと覚えていました（笑）。
どのようにしても完璧に出来るわけではないので、短い時間であっても濃密な時間を子どもと共有することが大切だと思います。

仲田：外崎さんは今後ご家庭を持ったときを想定して、不安なことや期待していることがあれば教えてください。

外崎：お二人のお話をお聞きし、子どもは地域社会で育てるということに共感し、期待しています。
私の子どもの頃も、青森の「ねぶた祭り」の準備で大人と接することが多く、多くの人たちから学ぶことがあって良かったですね。
こうした社会との接点が子どものころから、あるとないのでは全然違うのではないかと思います。

仲田：ありがとうございます。
少しまとめますと、限られた時間を仕事と家庭でどのように使うのか、また使いやすくするのがキーになるということ。また、育児については母親だけで育てるのではなく、父親はもち論のこと、地域や親族など周りの協力の姿勢が必要になってくるのではと思いました。

では、女性が活躍するために、「誰が、何をするのか」というところをお三方にお聞きしたいと思います。

外崎：祖父母や近所の大人に育ててもらうことの大切さは感じますね。
女性が働きやすくなるためには、女性が周りの人に頼ってもよい関係を作る必要があるのではと思います。

吉見：女性がライフイベントを達成しながら働いていくには、制度を活用していく必要があると思います。職場では同僚や関係する人の理解が必要です。特に経営者やトップの方の理解が必要です。現場で働く社員の方がその制度を利用しやすくなりますし。
もちろん、家庭でも夫が積極的に家事も育児もすることも大切です。
そして一番大切なことは、女性自身がこれまでの「普通」や「女性だから」という価値観や意識を変化させるということだと思います。自分自身が一番手ごわい相手でした。この意識を変えないことには、行動を変えることは難しいと思います。

仲田：どのようにしていくとよいかということ、女性自身が考えていくことが必要だということですね。

女性だけでなく「誰もが活躍できる社会」を目指していくためには、お互いの「理解と寛容」や「あったかい声掛け」が必要かと思います。

それでは結びとして、佐賀先生からまとめをふまえて「誰がどのように」していくべきかをお話いただければありがたいですね。

佐賀：ダボス会議を主催する「世界経済フォーラム」の報告書では、男女格差を示す指標で日本は144カ国のうち114位という状態です。

「日本の常識」は「世界の非常識」ということもあるように、日本が世界と比較してどのような位置にいるかを認識すべきであると思います。(参考資料⑨、⑩)

また、日本の社会がずっと専業主婦が当然であるというわけではなく、農業が主だった時代には女性はもちろん子どもすら農作業をやっていました。昨今の働き方の見直しは日本にとっても個人にとっても必要です。

ダイバーシティを以って質の高い労働をするために、女性の力がますます必要な時代です。女性の力を埋もれさせることなく活躍できるようになるべきですね。

男性も「子育て」をすると脳が発達するそうですのでぜひ…(一同笑、拍手)。

仲田：お三方の熱き思いが伝わってまいりました。

やはり事実を見て日本だけでなく世界的な視点で、働き方や家庭の過ごし方を見ていくことが大切です。

また、「普通」ということに惑わされることなく、自分がどうしたいのかということ、を自問自答することに努めたいものです。

そして何より、「三縁の会」の皆さまが本当に自分たちの会社の社員がどのような思いで仕事をしているのかを理解し、家庭でも同様に、あったかい言葉を掛け合うことが大切だということ学びました。

ご参加の会員お二人さまから、貴重なご感想・ご所見をいただきましたので、ご披露させていただきます。

【八田香里 様 (公益財団法人 日本漢字能力検定協会 理事)】

その昔、新卒の就職活動時に「女性にとって仕事とは？」と面接官に聞かれた的外れな回答をした記憶のある私は”ポスト平成「女性活躍時代」はホンモノか”のテーマに心ひかれ参加しました。講師の方のそれぞれの仕事への向き合い方やキャリアの一端を聞かせていただき、共感するところ、参考になるところが多くあり大変有意義な時間でした。

ありがとうございました。

【村上真理子 様（エン京都株式会社 制作部 ディレクター）】

今回、三縁の会に初参加させていただきました。テーマは、「女性活躍時代はホンモノか」。

創立8周年特別記念企画というメモリアルな「座談会」で女性の活躍にフォーカスを当てて頂き、大変嬉しく思います。

女性の社会進出<草創期～現在>までの就業観を含め、生き方そのものの変化をパネラーの皆様の率直な“生の声”として拝聴し、今後の「自分の生き方」についても考える良い機会となりました。お招き頂き、本当にありがとうございました。

仲田：皆さん、本日はありがとうございました。